Portfolio

Yuka Kaneko

タイトル

TSUMUGI

サイズ・素材

3840×2160 , 1’ 09”

技法

Viedo

制作年

2025 年

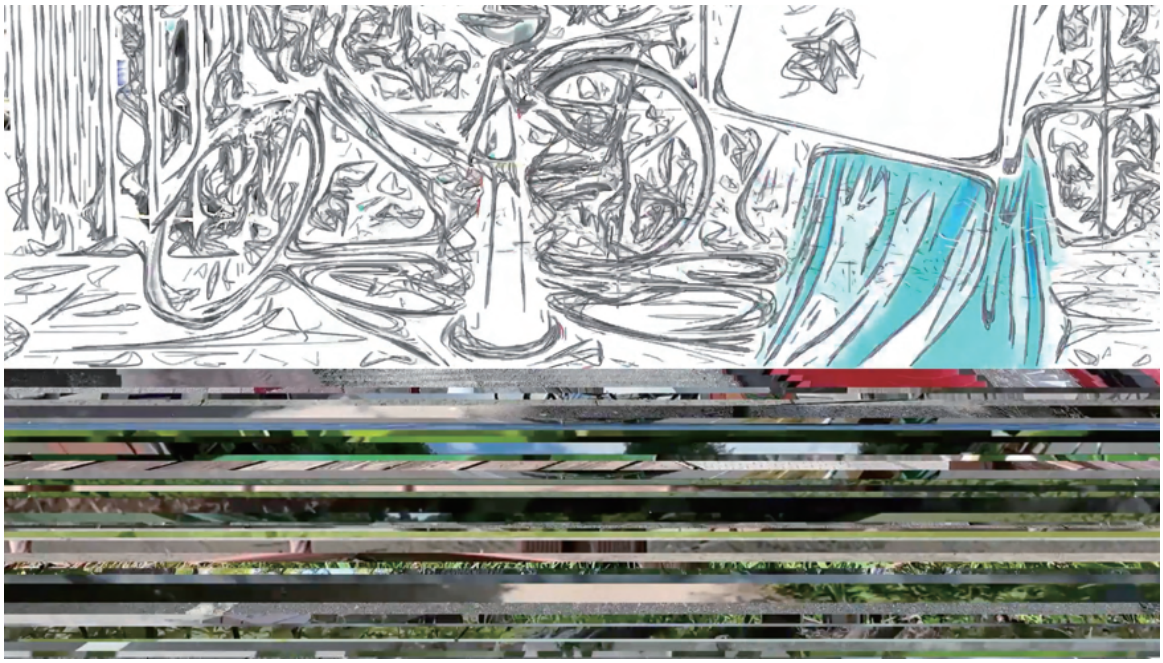
作品概要

繋がりとは、単なる物理的な接触だけではなく、一方的な個人の認識によっても成立する関係性になり得る。たとえ今後の人生で一度もすれ違うことのない他者であっても、認識の仕方次第では、私たちはその存在と繋がることができるのではないか。本作では、人・万華鏡・結ばれる紐という三つのモチーフを通して、繋がりのあり方を探った。

展覧会など

第 3 回札幌駅前通アワード最優秀賞

THE VILLAGE SAPPORO (北海道 , 2026.4~) 放映



タイトル

拭いとるように積む

サイズ・素材

1920×1080 , 10’ 00”

技法

Video installation

制作年

2025 年

作品概要

西荻窪周辺と善福寺公園の映像を撮影し、ロトスコープ風のアニメーションを重ねる。現代人が日常的に行っている「情報を上にスワイプしては、蓄積することなく消費し忘れていくこと」に対する抗いをテーマとしている。歩く人、すれ違う影、掲示物、自転車の通過など、生活のリズムを映し出す。スワイプして上へ消えるのではなく映像が沈殿していくことで時間と共に日常が積層のように積み重なっていく。

展覧会など

国際野外アート展 トロールの森 2025｜善福寺公園サービスセンターギャラリー (東京)

タイトル

nobody

サイズ・素材

針金、布、ステンレス、木材、ガラス

技法

インスタレーション

制作年

2025 年

作品概要

本作は透明な人体にスーツを着せた屋外インスタレーション作品。

スーツという均質化の象徴と、空洞の身体との対比を通じ、「誰でもない」存在として社会との間で揺れる現代人の姿を可視化する。

展覧会など

国際野外アート展 トロールの森 2025｜善福寺公園 (東京)

タイトル

田舎の四重奏

サイズ・素材

1920×1080 , 6’ 19”

技法

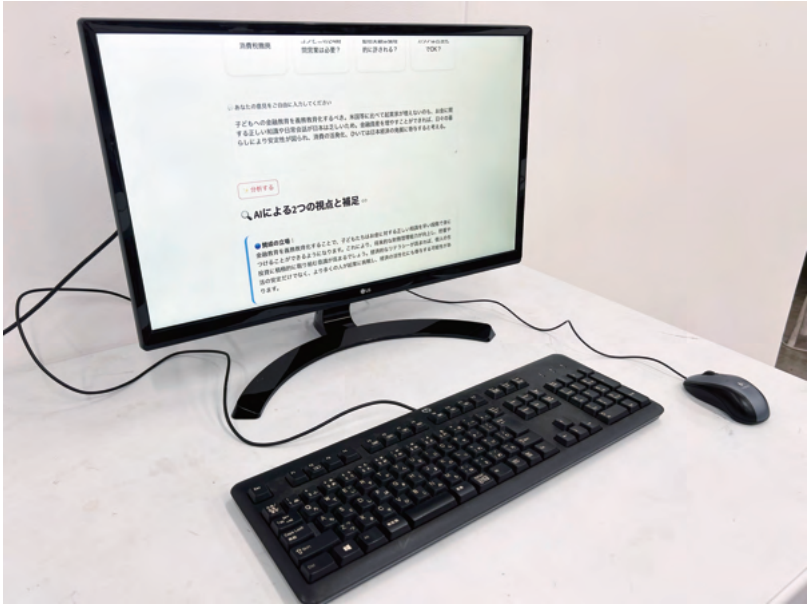
Video

制作年

2025 年

作品概要

とある田舎町で育った４人の女性。日々、家族や子育て、仕事に向き合う彼女たちは、一度集まると５時間ものあいだ話し続ける。飾らず等身大で語られた会話を記録し、日常に潜む " 生きた声 " として映像を添えて残すことにした。本作の手法は実写映像とアニメーションを用いた記録映像である。



タイトル

リベラル AI

サイズ・素材

PC/ タブレット / スマートフォン

技法

Web アプリケーション

制作年

2025 年

作品概要

「リベラル AI」は、SNS のアルゴリズムによって強化されるエコーチェンバー現象に対し、思考の揺らぎを促すことを目的とした思考介入型メディアである。ユーザーがあるテーマについて意見を入力すると、AI は賛成・反対・補完という三つの異なる視点を提示し、単一の意見に閉じることなく、多角的な立場を行き来する思考体験を促す。本作は、情報の偏りや分断が加速する時代において、異なる意見に触れる契機を設計する試みであり、メディアリテラシーや批判的思考を育む研究的実践としても位置づけられる。

タイトル

アノニマスの旅行記

サイズ・素材

1800mm×1000mm×1000mm

アルミ版反射シート、木材、釘、Ardino、サーボモータ、針金

技法

インスタレーション

制作年

2025 年

作品概要

本作は、身近でありふれた素材であるブルーシートを用いながら、スウィフトの『ガリバー旅行記』を想起させるインスタレーションである。日常的に活用されるブルーシートに覆われた形体は、内部で常にもがき続ける運動を繰り返す。その姿は、異国の地に翻弄されるガリバーを思わせ、同時に私たち自身の存在が社会の中で相対化され、拘束されていく様子とも重なる。ガリバーが「見られる存在」となったように、鑑賞者もまた、そのもがきを外側から観察する立場に置かれる。ブルーシートの仮設性は、漂流や仮住まいを連想させ、個が社会に覆われ、揺らぎながらも存在し続ける状況を浮かび上がらせる。

タイトル

Viewer

サイズ・素材

1000mm×1000mm×1000mm / LED ライト、椅子、Ardino

技法

インスタレーション

制作年

2025 年

作品概要

光に囲まれた一脚の椅子に座ると、その人物は光に照らされ視線を集めることで、その場において特権的な存在となる。同時に、その座は他者から切り離され、孤立を強いる場ともなる。本人の意思とは無関係に中心的な存在として位置づけられ、周囲に迎合しようとする承認欲求を生み出し、自らのふるまいや役割を無意識に調整するようになる。これは学校や職場、SNS など私たちの社会にも共通する見えない規律の一つである。一方で、誰も座らなければ椅子はただ光に浮かぶオブジェとなる。空席は、誰も選ばなかった、あるいは座ることができなかったという事実を示し、権力の象徴でもある椅子に対して他者への無関心や傍観といった現代の社会的構図を意識している。

タイトル

音色がくれば

サイズ・素材

1300mm×450mm×1200mm / 陶器、縞黒檀、ブラウン管モニターなど

技法

Media art / Installation

制作年

2024 年

作品概要

一定速度で回転する陶器の風鈴に、球体が当たる。

その風鈴の音をマイクで拾い、API を構築したタッチデザイナーに取り込みリアルタイムで画像生成を行うインタラクティブメディアである

展覧会など

2024　躍動する現代作家展｜福岡アジア美術館 (福岡)

タイトル

シュレーディンガー

サイズ・素材

1920×1080 , 3 分 21 秒

技法

映像

制作年

2024 年

作品概要

一方向性の情報伝達から、インターネットの普及により双方向性へと変わった。

しかしながら、従来の情報リテラシーである「批判的な思考で情報を読む」ではすでに本当の情報に辿り着くことが困難になっている。AI の参入により、ディープフェイクは素人の目では判断もつかないほど高度になっている。

本作はメディア表現における社会問題意識の喚起を主題としている

展覧会など

2024　カンカク展 #2｜福岡アジア美術館 (福岡)

タイトル

辿れば朝

サイズ・素材

アクリルパネル W900×D8×H900mm、毛糸、UV レジン

技法

ミクストメディア

制作年

2025 年

作品概要

風景は身体を通して形を変えていくものである。
カルデラ湖、アトサヌプリ (硫黄山)、動物、住民、民芸品。
条件が揃わなければ見ることのできない霧氷に遭遇した。
滞在中に記録した写真と映像を、自身の記憶の一部として見つめ直し、
そのイメージを再びなぞった。

展覧会など

Artist in Residence, AIR ｜ ARtINn 極寒藝術伝染装置
極寒芸術祭 2026 ｜ 雪杜野外美術館 (北海道)

タイトル

PLASTIC

制作年

2022~2023年

劇場

伏見ミリオン座、ヒューマントラストシネマ渋谷、

シネマジャック＆ベティ ほか全国の劇場

スタッフ

監督・脚本：宮崎大祐　プロデューサー：仙頭武則／樋口泰人]

担当

VFX

タイトル

EAT/STAY

サイズ・素材

1920×1080 , 4’ 25”

技法

映像

制作年

2026 年

作品概要

アネマリー・モル「食べる理論のためのレッスン」、星野太の『食客論』に着想を得た映像インスタレーション。食事をするための場所ではない公共空間において、一人の人物がただひたすら食べ続ける様子を映しています。

私たちは通常、家庭や飲食店といった限定された場所で食事をしますが、本作では「食べる」という極めて個人的な行為が都市の各所で繰り返されます。本来の用途とは無関係にその場所を一時的に占有する身振りは、既存の制度や規範の隙間を通って、その場の秩序に小さな変化をもたらします。

展覧会など

希望の野帖 成果展 | Art center New